

「今日に心を留める」

今から 20 年くらい前に、私は自分の母教会、つまり洗礼を受けた教会に通い始めました。その時の私の世界は、とても狭くて、通っていた大学と教会の表面的な部分しか知りませんでした。もちろん、本を読んだり、ニュースを見たりしていましたが、それだけで世界を知っていると豪語できるほど自信家ではありませんでした。大学では学内バイトを始めたあたりから、大学運営の内実を知るようになり、教会では牧師のお手伝いをする神学生をするあたりから、役員会や教区、教団のことをちょっとずつ知るようになりました。やっぱり、自分がその世界への関りを深めていかないと知れないことは沢山あるよね、と言うのが、私の経験則です。

大学院を卒業して、初任地である倉敷教会と竹中幼稚園に着任して、私の世界は、さらに広がりました。竹中幼稚園は、ちょうど認定こども園化の計画と、隣の土地取得に動いていました。毎月理事会を開いていて、私は書記として、この会議に出席していました。土地取得の議論に関しては、カーテンを閉め切り、理事各位の持ち物をチェックするなどして、情報漏洩のリスクを警戒しつつ話し合いを進めました。こちらの経営戦略が知れたら、入札で不利になるからですね。なんてことも、学ぶことができました。ある日の教会訪問者が、土地取得のライバルと知らずに、普通に牧師室までに通してしまって、あとで滅茶苦茶、牧師に怒られたこともあります。まあ、それは「じゃあ、先に教えといてよ」という案件ですが……。結局、倉敷教会と竹中幼稚園の隣の土地には高層マンションが建っていますが、作戦を立てて対処したことの知見を得たり、教会と幼稚園の大人たちが建設作業員たちに嫌悪の眼差しを向ける中で、幼稚園の子ども達は、明るく挨拶して応援する姿に、隣人愛の神髄を学んだり、色々と経験させてもらいました。

そして、敦賀教会と敦賀教会幼稚園にお招き頂いて、さらにもっと私の世界は広がりました。主任牧師としての働き、園長としての働き。それらは、自分の容量を明らかに超過したもので、取りこぼした機会や時間や人を今でも思い返して、反省してしまいます。それでも8年経って、中部教区やキリスト保育連盟や私立幼稚園協会のお仕事をさせてもらえるようになり、私の世界は、今も広がり続けています。

なんてことを滔々と語っていると、なんだか仕事自慢のように聞こえてしまうかと思いますが、今日は自慢と言うより、世界が広がることで見えてくる、「今日の平和」の有難みについて、お話ししたいと思います。私たちは、目に見えるところよりも、さらに広い社会や空間の中を生きていて、見えない働き者や奉仕者によって、生かされている、ということです。今度、敦賀教会幼稚園では、花の日の訪問で、血液センターや消防署などに花を贈ります。人生の中で、血液センターや消防署のお世話になることは稀だと思いますが、でも、その働きがなければ私たちの生活は、とても心許ないものになります。また、そういう人生の危機に備える働き以外にも、スーパーやコンビニの店員さん、ヤマト運輸とか郵便局の配達の人、携帯電話のシステムを維持するエンジニアや、SNSを開発するプログラマーなど、挙げたらキリのない働き者と奉仕者によって、私たちの日々は維持されています。まずは、そのことを知って、感謝する気持ちを忘れないでいたいと思います。世界を見る目を、ちょっと広げてみることで、いかに自分の人生が、人の働きに依存しているか、よく分かりますよね。

中部教区や日本基督教団の働きは、正直、好きになれない部分もありますが、でも、キリスト教の巨大組織として、日本の宗教制度や信教の自由保護のための大切な働きを担っています。キリスト教保育連盟の働きも、日頃の保育教育にまで染み込んでいる部分は少ないですけど、「キリスト教保育・教育」という言葉を気後れなく使うことができるのは、裾野の広い組織の下支えがあるか

らだと言えます。私立幼稚園協会の働きも、あまり意識すること無いですけど、幼稚園への補助金獲得のために県庁職員と喧嘩する理事長がいたり、誰とは言いませんけど、日本社会における幼稚園教職員の地位向上のために組織として動いています。教会や幼稚園の中からは見えないけど、教会や幼稚園の大事な部分を守ってくれている、外の働きがあることを、私自身もここ数年で学ぶことができました。

そして、その上で思うのは、「そうか、そういう外の働きってというのは、私たちが目の前の大切なことに集中するためにあるんだろうな」という。私たちが、心静かに祈り、教会のために奉仕できるように、教区や教団は、まあ、心地良いものばかりじゃないけれど、防波堤のように私たちのことを守ってくれています。キリスト教保育連盟も私立幼稚園協会も、私たちが大切な子ども達一人ひとりに向き合い、教職員が生活上の不安に駆られることなく、保育教育に専念できるように法制度を整えようと動いています。私たちは、私たちの周囲にある沢山の組織、働き者、奉仕者によって、守られて、自分の賜物を活かした自分にしかできない働きに専念できるようにと支えられています。ここ、この場所の大切な働きに集中できるように。今、この時の大切な働きに集中できるように。私たちは沢山守られて、沢山支えられている。そのことに気付いていたいと思います。

さて、だいぶ遠回りになってしまいましたが、今日の聖書のお話も、実は同じようなメッセージを伝えています。「目を覚ましていなさい」と教えられるイエス様は、未来を案じるあまり、今日という日を疎かにする人々のことを考えていました。この御言葉が収録されているマルコによる福音書が書かれたのは、紀元 70 年ごろ。ちょうど古代ローマ帝国によって、イスラエルの国と、キリスト教の信仰者たちが迫害されていた時代です。この最初期のキリスト教徒は、大帝国による過酷な侵略の現実を前にして、「世の終わり」を願い求めていました。「世の終わり」と言うのは、キリスト教における最終的な救いの日のことです。まあ、全てがリセットされて、幸せな人生を再出

発できる日だと思ってください。現実の世界があまりにも酷いから、全部を放り投げて、不確かな未来の救いが早く実現することを願ったんですね。そんな当時の人々に対して、聖書はこう言います。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも、子も知らない。父だけがご存じである」と。つまり、その約束された救いの日が、いつ来るのかは、誰も知らないよと。「子」と言うのは、イエス様のことで、「父」というのは神様のことですが、「世の終わり」に関しては、イエス様でさえ知らないというのが、この聖書箇所のお心なところなんです。ようするに、「そんな日がいつ来るかなんて、考えたって意味ないよ、だって、イエス様だって知らないんだから」ということです。キリスト教系のカルト宗教や、キリスト教系じゃなくても、人の不安を煽りたい困った団体は、「世の終わり」ということを強調します。東日本大震災の時も、能登の大地震の時も、あとコロナの時も、「世の終わり」という言葉で、混乱を持ち込もうとした人たちがいましたが、そんなの考えても意味ないし、分かるわけないよ、と今日の聖書箇所は言うわけです。そして、だからこそ、「目を覚ましていなさい」と。しっかり目を覚まして、変な噂に流されたり、それっぽい言説になびいたり、不安だからと安易に不確かな情報に飛びついたりしないようにしなさい、とイエス様は教えてくれています。

神様を信じるとか、キリスト教を生きるとか、言い方は何でも良いですが、自分を越えた存在を受け入れて、その存在に自分はしっかり守られているんだ、という信仰は、掛け替えのない今に集中するために、とても役立つものです。未来のことは分からない、不安も多い、てか、不安しかないかも知れない。けれど、私のことを愛してくださる神様がいらっしゃるなら、きっと大丈夫だ、自分の思い通りとは行かないだろうけど、でも悪いようには絶対にならないはずだ。だから、私は、今、目の前のことに集中して、未来に怯えず、打算的にならず、今の私と、大切な人のために力を尽くそうじゃないか、と。ちょうど、この教会を教区や教団が守り、幼稚園をキリスト教保育連盟

や私立幼稚園協会が守り、私たちが今の祈りと奉仕と仕事に専念できるように、神様は、私たちの未来に希望を置き、私たちが今という時間に集中できるよう導いてくださっています。そして、そういうブレない、目の前のことに専念する丁寧な所作が、より良い結果を残したりするもんなんですよね。不安に染まった手で、祈ることも、子どもを抱き上げることも、したくはないですよね。信仰を持つ、神様を信じるとは、そういう掛け替えのない今という時間を、安心して精一杯生きるために必要なものだと思えます。

もっとも聖書の言い方は、ちょっと意地悪ですけどね。「分かりもしない未来を気にしている暇があるのか。今日明日にでも世界は終わるのかも知れないのだから、後悔しないように、せいぜい気を付けて生きなさい」というニュアンスですよ。でも、その通りに思って、生きていたいと思います。大切な人と明日別れることになっても後悔しないように。言葉と行いを整えて、今日が人生最高の日になるように。神様の御守りを祈りつつ、私たちは私たちでお互いに配慮を忘れずに、教会のために、子ども達のために良い働きを心掛けて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日は、敦賀教会幼稚園の教職員の方々と共に、この礼拝を捧げることができました。働きは違えど、掛け替えのない大切な存在を愛し、今という時を喜び、感謝することで、今日も楽しく過ごすことを目指しています。教会と幼稚園の上に、あなたの御守りが豊かにありますように。明日への不安によって、今日の幸せを損なうことがないように。あなたがしっかりと私たちを支え、十分な愛を注いでください。明日への希望のもと、小さな子ども達が、自らの可能性と賜物を存分に発揮して、大人が想像さえしないような、本当の真っ新たな未来を受け取ることができますように。子ども達のことを、そして、寄り添う教職員のことを、祈る教会員一人ひとりのことを、大いなる祝福で満たしてください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお献げ致します。

6月召天者を憶える祈り 詩編 33 編 12～15 節

いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は。

主は天から見渡し／人の子らをひとりひとり御覧になり

御座を置かれた所から／地に住むすべての人に目を留められる。

人の心をすべて造られた主は／彼らの業をことごとく見分けられる。

井上諭吉兄 いのうえ ゆきち けい (1991 年 6 月 8 日)

源田きさ姉 げんだ きさ し (1985 年 6 月 12 日)

橋本恵子姉 はしもと けいこ し (2014 年 6 月 12 日)

野村芳枝姉 のむら よしえ し (2002 年 6 月 13 日)

千波晴子姉 ちば はるこ し (1988 年 6 月 23 日)

木下美邑姉 きのした みう し (2007 年 6 月 28 日)

神様。私たちは今、あなたの知られざる御心によって、先に天へと召されし、6月の召天者の方々のことを憶えて、祈りを合わせています。信仰の先達のことを祈りに憶える時、私たちの想いは、この地上を離れ、はるかあなたの住まう天上へと及びます。今は、あなたの御腕に抱かれてとこしえの平安に内に憩うておられる方々に想いを馳せながら、いずれ来る再会の日を待ち望みます。この6月に召された方々と、未だ地上を生きる私たちとは、今は離れ離れに時を過ごしていますが、終わりの日には、あなたの御前において、再び相まみえることになると思います。その来る日を目指して、私たちはあなたによって与えられた命を精一杯に燃やしつつ、主の民として相応しい生き様を示してゆくことができますように、あなたが導いてください。また、在りし日の方々の姿を心に浮かべることで励まされ、その信仰を受け継ぎ、次代へと伝えていくことができますように切に願います。天の上には限りない平安が、地の上には進むべき標と力強いお支えがありますように。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。